

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小中学校

研究紀要

自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造

～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～

1 年次



令和5年度

はじめに

多くの人がスマホを持ち、車の自動運転も進化し、セルフレジも増えてきました。

学校では、子どもたちが一人一台のパソコンを抱えて学び合っています。

さて、明治5年に「学制」が發布され、すべての国民が小学校に就学することが定められました。それから150年、みんなと同じことができるという価値観が学校教育のベースになっていて、講義形式の授業や記憶力をテストで測りランク付けするような学習評価が、未だ払拭しきれていない状況もあります。

そのような中、全国の小中学校で約30万人の不登校児童生徒がいて、過去最多を更新し続けています。教職員も、心理的要因による療養休暇の取得人数が増え続けています。教員採用試験の倍率は下降し、教職員が不足している学校も当たり前になってしまっている状況です。

また、約15年後には、現在ある職業の半分くらいが「A I (Artificial Intelligence)」に取って代わられると言われています。将来、学校も「A I」に占拠されてしまうのでしょうか。きっとしなやかな変化を遂げて、子どもたちの笑顔が輝く学校が存在していると信じます。

今こそ、教職員だけでなく、児童生徒、保護者、関係者、地域の方々と、学校教育を根本から問い直し、新しい時代の学校教育を構築すべき時だと考えます。言い換えれば、未来を生きる子どもたちのための教育を、みんなでデザインできるチャンスではないでしょうか。

そこで、まずは小学校と中学校が繋がり、「中1ギャップ」を解消することが必要だと考えました。

私たちは、学校研究を通して、小学校と中学校の学びの連続性を図ることから始めようと、共通の研究主題として「自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～」を設定しました。この研究主題を具現化していくために、小学校と中学校の教職員がそれぞれの授業を一緒に見て、膝を突き合わせて研究協議する機会を増やしました。初めは堅かった顔が、回を重ねるごとに柔らかくなり、真剣な議論の合間に笑い声が聞こえてくるようになりました。よく小学校と中学校は文化が違うと言われます。私たちが、お互いの文化を認め合い、それぞれの良き文化を残しながらも、融合させてより良い文化を創っていく姿勢を示すことは、子供たちのダイバシティな未来創りにも通じると思っています。

私たちは、「多くの学校のお役に立てる実践研究」を目指しています。皆様の学校の子どもの笑顔に繋がり、誰一人取り残さない「みんなの学校」づくりのお役に立てれば、たいへん嬉しく思います。

このような私たちの研究の趣旨をご理解いただき、神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・神奈川県公立小学校長会・神奈川県公立中学校長会から後援していただいております。

実際の研究推進については、神奈川県教育委員の笠原陽子先生（玉川大学教師教育リサーチセンター）をアドバイザーとして、ご指導・ご助言をいただいております。今年度の研究発表会では、笠原先生と上智大学の奈須正裕先生にご講演いただきました。なお、各教科等では、神奈川県教育委員会の指導主事の皆様や横浜国立大学の教員とも連携して、教育行政と研究者と実践者の立場を融合させた研究推進を目指しております。

これからも、新しい時代の学校教育を研究し、チャレンジしてまいりますので、今後とも本校の研究にご指導・ご鞭撻くださいますようお願い致します。



令和6年3月

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
同 附属鎌倉中学校
校長 青木 弘

目次

はじめに	1
I 研究の概要	5
II 小中合同研究	12
III デザインシート (DS)	14
IV 研究方法	21
V 個別最適な学び	22
VI 研究の経過	24
VII 研究の成果と課題	27
VIII 各教科等の実践	30
国語科	 32
社会科	 46
算数・数学科	 61
理科	 77
生活科	 87
音楽科	 93
図画工作・美術科	 107
技術・家庭科	 122
体育・保健体育科	 133
外国語科	 147
特別の教科 道徳	 162
総合的な学習の時間	 172
IX 研究推進だより	193
X 校内研究アドバイザーより	224
おわりに	227

I 研究の概要

1 学校教育目標を達成している子供の姿

「自立に向けてたくましく生きる」という学校教育目標について、本小中学校では、以下のような子供たちの姿をイメージした。

「自立」とは、自分の思いや願いを叶えたり、みんなの幸せを考えて行動したりしている姿を表している。「たくましく」とは、思いや願いを叶えるための方法や考え方を身に付けたり、目的達成の途中であきらめることなく挑戦し続けたりする姿を表している。

上記の姿を目指すために小中学校の教職員で導き出したのが、「自己実現」の3つの姿と「共生」の姿である。

「自己実現」では、まず子供たちが「〇〇したい」「〇〇になりたい」という思いを持ち、その解決に向けた見通しを立て、身に付けてきた解決のすべ（手段・方法）を活用しながら繰り返し問題解決に向かう姿を想定している。9年間の学校生活の中で様々な問題解決に取り組むことで、これからの人生でも応用可能な力を養っていけると考えている。

「共生」では、自己理解と他者理解を通じて一人ひとりの違いを理解し、お互いを認め合い切磋琢磨し合う環境が空気のように当たり前に存在することで、探究活動がより深い学びになったり、よりよい社会を作り出していく意識が高まったりしていくことを想定している。

小中学校9年間でめざす「自立に向けてたくましく生きる」子供のその先には、Well-being（みんなが幸せに生きること）を志向する姿をイメージしている。この目標が9年間で終わるのではなく、人生を通して考えていけるようなものであり、子供の成長を保証するものとして、本小中学校では次のような研究主題を設定した。



2 研究主題

自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造

～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～

3 研究構想について

○自己実現の3つの姿

自己実現

- ・「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」をもっている姿
- ・解決のすべを知り、使っている姿
- ・目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

まずは、この構想の根幹を担っている考えがある。それは、「子供は生まれながらにして有能な学び手である」という子供観である。この考えのもと、この構想がスタートしていることを初めにおさえておきたい。そのため、樹木（イメージ図）の根の部分には「一人ひとりの思いや願い・個性」を大切にしながら教育活動を実施していくという教師の思いが込められている。この「一人ひとりの思いや願い・個性」を大切にしながら授業を展開していくこと自体が、自己実現の1つ目の姿、**子供の「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」という姿**を引き出すことになる。

次に、樹木の幹の部分「生活場面（探究）」としている。この研究の目的である自己実現と共生の姿は、子供たちが自分の人生を幸せに生きていけるようにと願って作ったものである。その願いと同様に、構想図も子供たちが生きていく実生活や社会生活で起こる様々な問題に、適切且つ個性的・創造的に解決できるようになってもらいたいという思いで作っている。そのため、幹をなすのは生活場面での探究であり、子供たちが、この幹をどれだけ太く立派なものにしていけるかということを大切にしている。具体的には、生活科や総合的な学習の時間、特色のある行事活動を大切にすることで、実生活や実社会に関わる探究的な学びを充実させていく。

そのような考えから視野を広げ、枝・葉に位置づけた教科の役割について説明する。教科には、学問・科学・芸術といった親学問があり、そこには先人の知恵が豊富にある。その知恵の中で、生活場面に生きるものは何かを改めて問い直していく必要があると考えている。各教科の目的を明確にした上で、生活場面で有効に働く汎用的な力や生活場面に生きる知識は何かを整理していく。そして、教科の学びを通して培ったものが、生活場面に活用・発揮できた時に、イメージした樹木の幹はより太く立派なものになっていくと考えている。この考えを自己実現の2つ目の姿、**解決のすべを知り、使っている姿**として表出している。



自己実現の3つ目の姿、**目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿**については、全ての教育活動の中で、目的を明確にしながら子供たちが主体となって活動していくこと。また、その目的を達成するために粘り強く、繰り返し取り組む姿を想定して設定した。これが自ら主体となって探究する姿であると考えている。さらに、長い時間をかけながら目的に向けて試行錯誤し、達成感・成就感を得ることで、情意面が育成され、自己実現の1つ目の姿、**子供の「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」という姿**に繋がっていくと考えている。

以上の自己実現の3つの姿は、相互に関連し合いながら循環していく。その循環を通して、以下のような子供の姿の高まりが見られると考えている。

- ・子どもたちの「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」という姿が、漠然としたものから具体的なものになっていく。
- ・解決のすべを知って使うことで、質、量ともに高まり、実生活や社会生活で起こる様々な問題に、適切且つ個性的・創造的に解決できるようになっていく。
- ・繰り返し取り組み、達成感・成就感を味わう経験を積み重ねることで「達成するまで続けたい」という思いを持つ子になっていく。

○共生の姿

共生

・一人ひとりの違いを理解し、よりよい社会生活の在り方を追求している姿

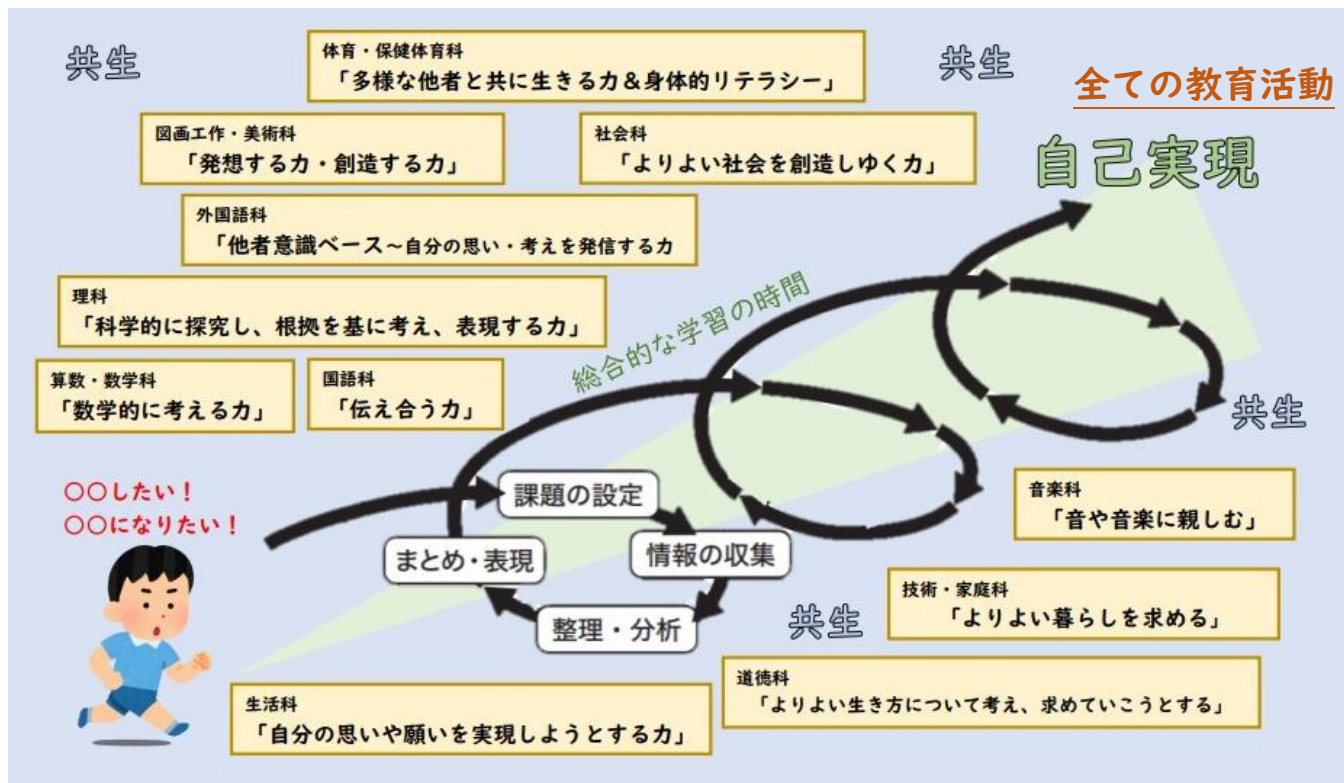
これから子供たちは、誰もが安心して暮らせる社会を作り出していくために多様性を尊重しながら、お互いが補い合い生きていくことが求められている。そのためにも、多様な在り方を受け止めることや対立関係を調整することができるような力をつけていくことが大切になる。

以上のことを考えた時に、「一人ひとり違うということの理解」から始める必要がある。その理解を前提として、クラスやグループで共通の目的を達成するような活動を取り入れる。そこで、納得解や最適解を見つけ出すことで、さらなる一人ひとり違うといったことへの気付きと、みんなでよりよい社会生活の在り方を模索していくことができる子供の姿をイメージしている。

そのようなことを想定し、構想図には**一人ひとり違うということの理解**と**最適解や納得解を見出す活動**が自然と行われている状況を空気のような存在として位置づけている。具体的には、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させながら教育活動を展開し、共生の意識を高めていく。



4 研究構想の具体的なイメージ



1 ページ目の樹木の構想図を具体化したものが上図になる。

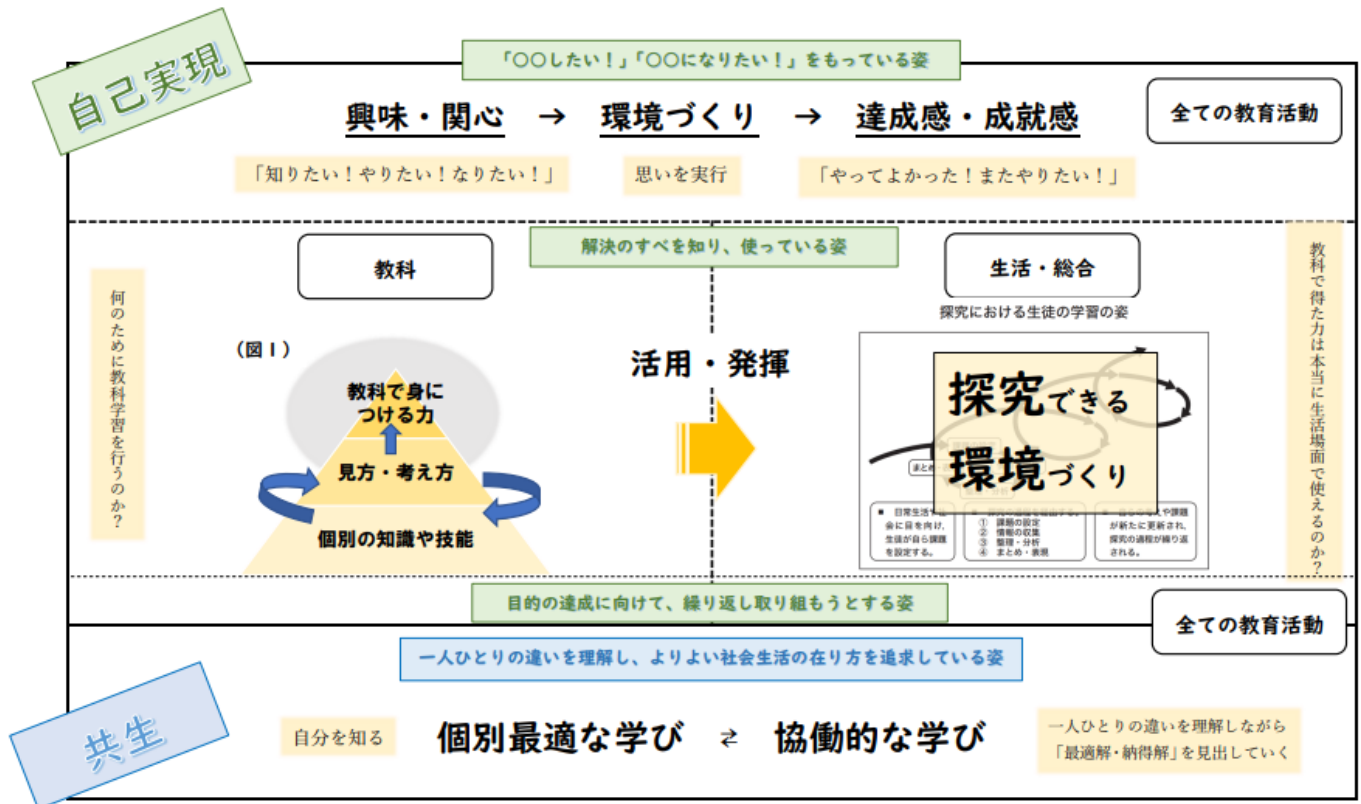
イメージとしては、**自己実現できる子**を育成するために、各教科で身に付けた資質・能力を総合的な学習の時間で発揮していく構造をとっている。そのため、教科で培った力を発揮できる場として、総合的な学習の時間（探究の時間）を教育課程の中核として位置付けている。

総合的な学習の時間では、子供一人ひとりの「〇〇したい！〇〇になりたい！」という思いを大切にしながら活動を展開していく。その活動の中で、「課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現」という手法を必要な場面で使いこなせる子を育成していく。

教科では、本校の各教科部で「なぜ今の時代にその教科が必要なのか？」「生活場面で願う子供の姿とは？」ということを考え明確にしてきた。そして、それぞれの教科で大切にすることを上図に記載した。詳しくは、この後の**各教科 DS**に記載している。

今後、この教科 DS を子供と共有し、子供が教科の意味・特性を理解しながら、教科を自律的に学んでいけるようにしたいと考えている。そうして、教科を通して力を付けてきた子供たちは、総合的な学習の時間の活動の中で、「この場面では理科の実験の時の方法を使って活動の見通しを立てよう。」「この場面では、社会の時のように多角的に物事を見て話し合ってみよう。」というように自分たちで学んだことの発揮場面を考えながら自己実現していく子供の姿を想定している。

5 研究構想の実現に向けた具体的な方策



全ての教育活動

～自己実現～

◎「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」をもっている姿

◎解決のすべを知り、使っている姿

◎目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

子供が自己実現力を育んでいくための環境を整えていく。そのために、小学校6年間・中学校3年間で別々だった教育課程を小中学校9年間の教育課程として再編成していく。

1、育成する資質・能力を明確にし、各教科・各行事で9年間の繋がりを考えていく。

2、教育課程の中で、各教科と総合的な学習の時間の役割を明確にし、修得・活用・探究の構造を見える化して、自己実現力を育成するまでの過程を明確にする。(4ページ目参照)

～共生～

◎一人ひとりの違いを理解し、よりよい社会生活の在り方を追求している姿

全ての教育活動の中で、個別最適な学びと協働的な学びを通して、自分理解、他者理解を深めたり、最適解・納得解を導き出したりできる機会を設けていく。その過程の中で、一人ひとりとは違うということへの理解が深まっていったり、その理解をもとにしてよりよい社会生活の在り方を追求したりしている姿をイメージしている。

教科

～自己実現～

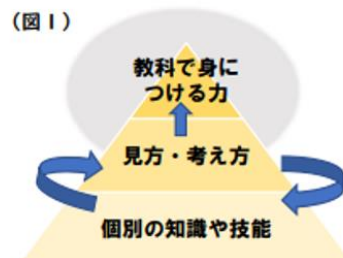
◎「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」をもっている姿

教科では、学習指導要領でいう「内容」が明確に定められている。教師は、この「内容」に興味・関心を持てるような働きかけをしていく。例えば、子供たちの持っている既有知識を足場に授業を構成したり、実生活・社会生活の学びと関連付けたりしていくということが考えられる。

次に、子供たちが持った興味・関心を足場に、その思いや願いを叶えていける環境（時間や場）作りを大切にしていく。その環境の中で思いを生かしながら教師のねらいに向かっていけるようにする。この一連の取り組みの中で、子供たちの達成感・成就感に繋がられるようにしていく。

◎解決のすべを知り、使っている姿

各教科では、「何のために教科学習を行うのか?」ということ問い直し、改めて教科で身につけていく力を明確にする。その際、教科で身につける力が教科内だけで働くのではなく、実生活やこれから子供たちが生きていく社会生活でも生きる力なのかということを考えて設定していく。各教科で身につけていく力には下から「個別の知識や技能」「教科特有の見方・考え方」「教科目標」のような階層があると考えている。図1のように視覚化することで、教科の最上位目標を意識しやすくしている。各教科、実践を積み重ねる中で、生活場面に発揮しやすい見方・考え方や個別の知識や技能についても検討し、各教科の強みを明確にしていくと共に、教科目標を達成するまでの方策を明らかにしていく。



◎目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

「目的を明確にする」「繰り返し取り組めるような環境づくりをする」という2点を大切にしていく。単元の目標を達成するという視点だけではなく、教科の目標を達成するために、単元をまたいで繰り返し取り組むことが考えられる。同じ学び方や同じ授業展開など、学びを繰り返す中で、教科特有の見方・考え方を身につけたり、教科目標を達成したりしている子供の姿をイメージしている。

総合的な学習の時間

～自己実現～

◎「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」をもっている姿

総合的な学習の時間のような生活場面に関する学習では、社会にある学びの探究を大切にする。また、「子供たちの思いや願いを生かすことができる時間」という強みを生かすためにも、今の子供たちの思いや願いをしっかりと受け止めるようにしていく。実際には、子供たちの自己決定・自己選択を重視し、子供たちの「〇〇したい!」を引き出せるようにしていく。

環境づくりに関しては、子供の思いや願い、気付きの質の高まりに応じて更新していく事や、発達段階に応じて子供たちが自分たちで環境を作り出していくということも大切にしていきたい。こうした環境の中で試行錯誤し、目標を達成することで、「やってよかった!」という思いに繋げていく。この達成感・成就感が子供の情意面を育成し、「次は何をしようかな?」と自ら主体的に考えを広げていける子供の姿をイメージしている。

◎解決のすべを知り、使っている姿

各教科で得た力を「解決のすべ」として蓄え、生活科・総合的な学習の時間や行事のような生活場面で発揮できる子を育てていく。そうすることで、各教科と総合的な学習の時間が相互に関連し合いながら、総合的に子供を育んでいけると考えている。そうして力をつけた子供は、これから生きていく実生活や社会生活で起こる様々な問題に、適切且つ個性的・創造的に解決していけると考える。

総合的な学習の時間での探究の姿としては、「課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現」を自分の力で何度も繰り返す子供の姿をイメージしている。そして、総合的な学習の時間で培う「解決のすべ」はこの探究の姿にある。この探究の繰り返しの中で、リフレクションを大切にしながら、子供たちの気付きを促進し自己の生き方・考え方に繋げていける子をイメージしている。この一連の営みの中で、どれだけ教科で培った力が発揮されているのかを見取り、教科の重要性を再認識できるようにしていければと考えている。

◎目的の達成に向けて、繰り返し取り組もうとする姿

プロジェクト型の学習を行う。子供たちが自分たちで目的や目標を考え、そこに辿り着くまでに見通しを立てて試行錯誤する活動を行う。この活動の中で、目的・目標の設定はとても重要である。子供たちが設定したものが高すぎると達成感を得られず、低すぎると物足りない活動になってしまう。そこで、教師のかかわりが大切になる。達成に至るまでの見通し（時間・活動）を子供に聞きながら、目的・目標と一緒に検討していくことが大切になる。

「繰り返し取り組もうとする姿」については、時間の保障がされている総合的な学習の時間のメリットを最大限活用していく。ポイントになるのが、繰り返し取り組む環境があるかどうかである。子供の「やりたい!」を叶えていくためにも大人の都合で活動が停滞するということは避けていきたい。そのためにも子供の都合で進められる学習材とは何か。どのような環境をつくればよいか。というのを考えていきたい。

参考文献・引用

汐見稔幸 『「天才」は学校で育たない』 ポプラ社 2017

汐見稔幸 『教えから学びへ』 河出書房新社 2021

白井俊 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』
ミネルヴァ書房 2020

田村学 『「深い学び」を実現するカリキュラム・マネジメント』 文溪堂 2019

奈須正裕 『教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベースの授業づくりガイドブックー資質・能力を育成する15の実践プランー』
明治図書出版 2017

奈須正裕 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社 2021

奈須正裕 『個別最適な学びと協働的な学び』 東洋館出版社 2021

奈須正裕 『「少ない時数で豊かに学ぶ」授業のつくり方 脱「カリキュラム・オーバーロード」への処方箋』 ぎょうせい 2021

奈須正裕 『個別最適な学びの足場を組む。』 教育開発研究所 2022

野田敦敬 田村学 『学習指導要領の未来』 学事出版 2021

平野智久 『「はじめに子供ありき」の理論と実践』 東洋館出版社 2022

藤原さと 『「探究」する学びをつくる』 平凡社 2020

Ⅱ 小中合同研究

研究を小中学校合同で行うにあたり、様々な組織、体制を整備していった。研究推進委員会や研究会を小中で行うだけでなく、研究発表会や定期的な研究授業も小中合同で行うことで、小中のつながりを資質・能力の面から検証していくことを大切にしてきた。

○小中研究推進委員会

小中学校よりそれぞれ6名ずつ研究推進委員が選ばれ、小中の研究主任から小中研究推進委員長として小学校から1名、副委員長として中学校から1名選出した。組織を「研究運営」「DS・紀要」「研発・授業研」「個別最適」「情報発信・振り返り」グループに分け、小中それぞれの推進委員で構成されている。推進委員会が開かれなくても定期的に小中学校を行き来して、研究を進めていく上で必要なやり取りを行っていった。

○小中研究会

小中学校で共に毎週火曜日を研究優先日として行事等の予定を入れず、小中合同で研究会を開催した。小中学校の全職員が一同に会し、研究推進委員会で検討した内容を全体で共有したり、各グループから必要な内容を発信したり、小中教科部で集まって話し合ったりする場としている。



○小中合同研究発表会

本小中学校では、研究発表大会を小中学校合同で開催し、小中学校のつながりを意識した提案授業を行っている。小中学校全教科・領域で同じ重点目標を設定し、それらが小中学校共通して見て取れるような授業を行っている。参観者は小中同じ教科で参観したり、興味のある教科を参観したり、参観者の興味や関心に応えられるように公開授業を設定した。



研究授業後の協議会も小中合同で実施した。運営の方法は各教科部によって異なるが、小中学校それぞれの授業を振り返る形で行った。参観された先生方から貴重なご意見を頂いたり活発な議論が行われたり、参観された先生方も小中学校入り混じって協議会が展開された。



○小中合同授業研究会（校内研究授業）

年間4回設定している校内研究授業では、小中学校それぞれが公開することで、小中のつながりを日々意識するようにしている。今年度は6月、7月、12月、1月に実施し、1回につき3つの教科が提案授業を行った。小中学校それぞれの授業を全教員で各教科に分かれて参観し、放課後に授業検討会を行った。研究の重点を意識した授業であったか、子どもの姿から見取することを大切にしながら協議を重ねていった。



○日々の実践より

研究会の日以外でも、小中教科部で相談して、小中学生が交流することで共に高め合える機会が増えてきている。中学生が小学生に教えたり、小学生が中学生に質問したり、小中学校が一緒に活動することで身に付く力が何かを検証している。異学年交流を9年間の中で考えていくことで、9年間で身に付けさせたい力が何かを見出していけるだけでなく、これからの学校の在り方について模索していくことができると考えられる。



Ⅲ デザインシート ～小中9年間を見通した「学びのデザイン」～

(1) デザインシートとは？ー学習指導案とは何が違うのか？ー

そもそも、学習指導案に統一された様式はない。それぞれの学校や研究会において培ってきた研究の歴史、学習者の課題、現状から様式はデザインされている。つまり、学校や研究会の教育観、授業観が反映されている資料(文書)が、学習指導案ということである。

これまで本校の研究では子供の姿を原点として、そこから願う姿を想定し、その姿を見取り、指導に生かしていくという「子供ありき」「子供主体」の考え方を大切にしてきた。

このようなことから、デザインシート(DS)とは、「子供ありき」「子供主体」の考えに基づいてデザインされた学習指導案という捉えである。

(2) 各種DSの構成

① 教科デザインシート

教科デザインシートとは、各教科の全体計画である。学校教育目標「自立に向けてたくましく生きる」を達成している子供の姿を想定し、実生活・実社会で生かしていくには教科でどのような資質・能力を身につけさせたいかを示している。

まず、最初の項目に教科教育で大切にしたいことを据えている。さらにその下にはなぜこの教科で大切にしたいことをこのように設定したのか、その力を育むための大まかな道筋などを示している。また、それに対してどのような取り組みを行っていくのかを記している。

右上部のピラミッドは、各教科で知識・技能や見方・考え方を往還的に獲得していく中で、実生活・実社会に生きる力が育まれるというイメージ図である。つまり教科DSとは、各教科の全体計画である。

算数・数学科
教科デザイン

小学校:荒谷舞 山口勇馬
柏木良輔 丸山健太郎
中学校:廣徳大輔 小野郁絵 湯川拓実

教科で大切にしていること

数学的に考える力 ~7つの視点に着目して~
各教科部で考える大切にしたいこと
見方・考え方
個別の知識や技能

願う子供の姿
子供の具体的な姿
小中の取り組み

なぜこの教科が必要なのか、実生活・実社会にどのように生きていくのか、そのためにどのようなことが必要なのか、それを育むための大まかな道筋などを示している。

ここでいう「願う子供の姿」とは、教科で培った力を実生活・実社会に生かしている姿である。より具体的に「こうなったらいい」「こんな風に力を発揮してほしいな」を教科部で共有することで、じゃあどうしたらいいかも考えられるし、生徒の姿から、自分たちの取り組みを評価し改善することもできると考える。

願う子供の姿に近づくために、どのような取り組みを行うのかを示している。小中共通して取り組みたいことや発達段階に応じて重点的に大事にしたいことなどを示している。

②授業デザインシート

授業 DS は、「単元構想」、「学びのストーリー」、「本時のストーリー」の3部構成になっている。以下でそれぞれの項目について具体的に説明していく。

単元構想

単元構想では、これまで子供たちがどのような学びを獲得してきたか、課題は何かなど、子供の実態を示した上で、課題としてあがっていることを元にどのような考えでこの単元を設定したかを主に示している。目の前の子供の姿から、授業や単元を考えようとする本校で大事にしている部分が現れている。

デザインシートは本校における学習指導案の役割でもあるので、下部には学習指導要領に準拠した評価規準も示している。

中2年 数学科 授業デザインシート		研究発表大会【2年3組】 授業会場：中学校会議室 授業者：小野 郁絵						
単元名 一次関数 ～鎌倉の二酸化炭素濃度は将来どうなるのか～ 本単元に取り組む子供の実態 小学校では、もともと変化する二つの数量やそれらの関係に着目し、変化や対応の特徴を見いだして、二つの数量の関係を表や式を用いて考察した。簡単な場合の比例の関係などを扱い、もともと変化する二つの数量に対して規則性を見いだしたりグラフに表したりする活動をしてきた。第1学年では、具体的な事象における二つの数量の変化や対応を調べ、関数関係について理解できるように比例・反比例を関数として扱ってきた。また、グラフの特徴を確認し、関数関係と見なすことで課題に取り組むことができる。比例・反比例のグラフについて定数が付く、ヒストグラムのようなグラフの読み取りや、変化した際にもう一方が連続的に変化するとは異なるのではなく、その増え方の関係として見てもらう様子が見られた。式やグラフをかくことができず、グラフから式を求めることができないなど、式とグラフの関連付けがまだ定着していない実態もある。								
単元設定の理由 比例・反比例は一次関数の特別な場合であるといえる。比例・一次関数の違いや共通点を見ていく中で変化の割合、グラフの傾きなどを理解できるようにする。グラフでの傾きや切片が表ではどのように表されるのかを確認しながら、表と式とグラフの関連付けを定着させたい。 また、知識として定式などの公式を覚えていて使っている子供もいる。しかし、その公式の意味まで理解して使っている子供は少ない。どうしてその公式が成り立つのかを考えさせ、理解を深められるように促したい。 また、実生活・実社会において一次関数の関係にあるものは多く存在する。理科の実験等でも、多少の誤差はあるものの一次関数と見なすことで、先を手探りしたり、性質を推定したりすることもできる。そういった例を取り上げ、実生活・実社会で生かせる姿に付け加えたい。気温や株の利益など身近な一次関数と見なすことができる題材を取り上げ、その中で、定数の意味合いを明らかにしたい。また、「どうして傾きが変わるのか」「なぜ傾きが1の上昇する数に1を乗せるのか」「なぜ定数の値が2なのか」など、他の教科に繋がる知識・技能を身に付けたい。考えも大切にしながら進めたいと考えている。								
本単元で願う子供の姿 ○既習を生かして課題を解く姿。 ○具体的な事象における二つの数量の変化や対応を調べ、関数関係について理解する姿。								
評価規準 <table border="1"> <thead> <tr> <th>知識・技能</th> <th>思考・判断・表現</th> <th>主体的に学習に取り組む態度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> ○一次関数について理解している。 ○事象の中には一次関数として捉えられ、表や式で表わすことができるものがあることを知っている。 ○二元一次方程式を、関数を表す式とみることができる。 </td> <td> ○一次関数として捉えられる二つの数量の関係を、表や式で表わすことができる。 ○二元一次方程式を、関数を表す式とみることができる。 ○一次関数を用いて具体的な事象を捉え考察し表現することができる。 </td> <td> ○一次関数のよさを実感して取り組む。 ○一次関数について学習の成果を生活や学習に生かそうとしたり、一次関数を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしていたりする。 </td> </tr> </tbody> </table>			知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	○一次関数について理解している。 ○事象の中には一次関数として捉えられ、表や式で表わすことができるものがあることを知っている。 ○二元一次方程式を、関数を表す式とみることができる。	○一次関数として捉えられる二つの数量の関係を、表や式で表わすことができる。 ○二元一次方程式を、関数を表す式とみることができる。 ○一次関数を用いて具体的な事象を捉え考察し表現することができる。	○一次関数のよさを実感して取り組む。 ○一次関数について学習の成果を生活や学習に生かそうとしたり、一次関数を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしていたりする。
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度						
○一次関数について理解している。 ○事象の中には一次関数として捉えられ、表や式で表わすことができるものがあることを知っている。 ○二元一次方程式を、関数を表す式とみることができる。	○一次関数として捉えられる二つの数量の関係を、表や式で表わすことができる。 ○二元一次方程式を、関数を表す式とみることができる。 ○一次関数を用いて具体的な事象を捉え考察し表現することができる。	○一次関数のよさを実感して取り組む。 ○一次関数について学習の成果を生活や学習に生かそうとしたり、一次関数を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしていたりする。						

子供たちはこれまで何を学び、どんな力をつけてきたのか、またどんな課題があるのかが示されている。目の前の子供たちにとって、何が足りなくて、どんな学びを進めたら良いかを考える上で、子供の具体的な姿は外せない要件であると考えます。

子供の実態を踏まえて、単元や題材を設定している。この単元（題材）でのねらいや特徴など、設定するに至った理由を示している。

この単元を通して学んだ結果、こうなってほしいという願う子供の姿を示している。

評価規準は学習指導要領に準拠している。

学びのストーリー

学びのストーリーでは、「単元目標を達成している児童・生徒の姿の想定」や「単元の学習活動(単元計画)」「単元を学ぶ児童・生徒の姿の想定」「評価・手立て」「重点①②との関連」が示されている。単元全体を見通したときに、どの場面でどのような子供の姿を期待しているのかを子供の学びのストーリーとして示している。

また、教師のしかけや評価についてもわかるようにしている。記録に残す評価と指導に生かす評価を意識しながら、どの場面でどのように評価するのかを明記している。

単元全体を通して重点①「子供の「やりたい!」を引き出す手立てと思いを生かす環境作り」と、重点②「解決のすべの育成に向けた授業デザイン」について授業者がどの時間でどのようにデザインしているのかを右欄に示すことで、学校で重視している資質・能力をどのように育成しようとしているのかがわかるようにしている。

学びのストーリー 全16時		本単元における重点	
重点① 子供の「やりたい!」を引き出す手立てと思いを生かす環境づくり		重点② 解決のすべの育成に向けた授業デザイン	
時	○学ぶ子供の姿・具体的な発言や反応	評価	重点①②
1	水槽に初めから水が入っていたら、 $y=2x+0$ という式になるね。 - 比例は $b=0$ の場合の一次関数なんだね。	【知識・技能】 一次関数が $y=ax+b$ という式で表される関係であることを理解することができる。 (発言、学習ノート)	重点①②との関連 単元構想の「評価規準」で示した項目を見取ることができる評価計画を立てる。Cの状況を生み出さないための手立てや評価の見取り方を示すこと、評価項目を焦点化し、まとまりの時間で評価することを大切にしている。 研究の重点①②との関連を示している。子供の「やりたい」を引き出す手立てをどのように仕掛けるか、解決のすべをどのように子供に身につけさせるかをより具体で示している。 学習活動を設定する時には、実際に学ぶ子供の具体的な姿を想定することを大切にする。学習活動と学ぶ児童・生徒の姿の想定を往還しながら、授業を構成していくことが求められる。
2	一次関数の値の変化を考察し、変化の割合の特徴を調べる姿 - 比例と考えると、同じ割合で変化するのはよいね。	【知識・技能】 変化の割合の意味を理解し、変化の割合とaの値の関係を理解することができる。 (学習ノート、学びのプラン)	
3	変化の割合ってaの値と関係しているんじゃない?	【思考・判断・表現】 変化の割合とグラフの特徴を考察し、比例、一次関数、反比例の関係について考える。 (学習ノート、学びのプラン)	
4	グラフの特徴を調べる姿 - 一次関数も比例も直線のグラフになるね。	【知識・技能】 一次関数のグラフを、傾きと切片を用いてかくことができる。 (学習ノート)	
5	比例のグラフから直線と区別がつかないものがあるね。 - 変化の割合が一定から直線なのか? 反比例は変化の割合が一定じゃないってこと?	【思考・判断・表現】 変化の割合とグラフの特徴を考察し、比例、一次関数、反比例の関係について考える。 (学習ノート、学びのプラン)	
6	一次関数の式を求めるとき - 表で変化の割合がわかれば、aの値が分かるよ。	【知識・技能】 グラフや与えられた条件から一次関数の式を求めることができる。 (プリント、小テスト)	
7	xが1増えたらyが2増えるから一番簡単に変化の割合を求められるんじゃない?	【主体的に学習に取り組む態度】 既習事項と結びつけて課題を解決しようとする。 (学習ノート、学びのプラン)	
8	連立方程式と一次関数のグラフの関係を知り、活用する姿 - 二元一次方程式について解くと一次関数の基本式に一致するね。	【主体的に学習に取り組む態度】 既習事項と結びつけて課題を解決しようとする。 (学習ノート、学びのプラン)	
9	連立方程式の問題は解けるけど、一次関数のグラフでも解けるね。	【思考・判断・表現】 事象の中から一次関数を見出し、それを利用して問題を解決することができる。 (発言、プリント、学習ノート)	
10	気温と標高の関係を一次関数で見ると、富士山頂の気温を予想する姿 - グラフにするとほぼ直線だから、一次関数として見ることができんじゃない?	【主体的に学習に取り組む態度】 これまでの学習を生かして具体的な事象における課題を解決しようとする。	
11	面積の変化を調べ、一次関数を見出して問題を解決する姿 - 三角形の面積が一番大きくなるのはいつだろう?	【主体的に学習に取り組む態度】 これまでの学習を生かして具体的な事象における課題を解決しようとする。	
12	これまでの学習を生かして実生活・実社会に生かそうとする姿 - 気温と標高の関わりから一次関数と見なすことができるかな? どのくらいのペースで気温が上がるのかを調べる。	【主体的に学習に取り組む態度】 これまでの学習を生かして具体的な事象における課題を解決しようとする。	
13			
14			
15			
16			

単元構想の「評価規準」で示した項目を見取ることができる評価計画を立てる。Cの状況を生み出さないための手立てや評価の見取り方を示すこと、評価項目を焦点化し、まとまりの時間で評価することを大切にしている。

研究の重点①②との関連を示している。子供の「やりたい」を引き出す手立てをどのように仕掛けるか、解決のすべをどのように子供に身につけさせるかをより具体で示している。

学習活動を設定する時には、実際に学ぶ子供の具体的な姿を想定することを大切にする。学習活動と学ぶ児童・生徒の姿の想定を往還しながら、授業を構成していくことが求められる。

本時のストーリーは、学びのストーリーの一部をより具体的に示した本時の学習指導案である。「学ぶ子供の姿」「本時における重点①②との関連」「評価」「支援を要する子供に対する手立て」等が示されている。この他にも、参観者に「授業の視点」や「授業者の考え方」、「本時の位置付け」を具体的に伝えることができるデザインになっている。

本時の学習活動を「学ぶ子供の姿」として具体の姿を想定しながら指導計画を立てている。めあて等を設定するだけでなく、達成している姿を想定することで、本時の学習活動・内容が適切か見直したり、改善したりすることができるようになる。また、右欄には重点①②が現れる場面や評価場面について示している。重点①②については、毎時間どちらも設定することは困難なため、どちらか一方のみの場合もある。

[illegible]

④教科 Re：デザインシート

授業 Re：DS は、教科 DS の振り返りである。教科で取り組んだことに対して効果的であったか、改善する必要があるかなどを子供の具体的な姿を通して振り返る。

教科 Re:デザイン 算数・数学

取り組みに対する振り返り

成果

小中接続算数科で大切にしたい7つの視点（困難・漢字・算術・多面的な見方・具体化・抽象化・モデル化・数感・発展）を子どもたちと生徒と共有し、授業実践を行った。今年度の研究を通して、次のような生徒の姿を見ることができた。

- 既習を根拠とした解決：既習の知識を活用して問題にアプローチし、解決を試みるなど、粘り強く取り組む姿
- 数学的な視点の共有：課題解決中に数学的なアプローチを共有しようとする姿
- 新たな考え方の試行：自分なりの考えを知り、有効なアプローチを試みる姿
- 課題解決の戦略と統合：有効だった数学的なアプローチを振り返り、他の問題でも応用する姿
- 新たな問いの探究：課題解決後も新たな問いを探究し、別の視点や条件を考え続ける姿
- 仲間との協力：仲間の考えを受け入れて、より良い解決法を探究する姿
- 学習の応用：学んだ知識を他の領域や日常生活に応用しようとする姿

また、学習の流れを整理することで、子どもたちが自分のペースで学び、自分のペースで学ぶ時間を確保すること、粘り強く取り組む姿が見られた。

教科での取り組みの成果

このことから、今年度の校内研究の重点目標になっていた「やりがい」を引き出す手立てと意思を共有する環境づくりを出発点として、『解決のすべての育成に向けた授業デザイン』をある程度達成できていたと考えられる。学習の流れを表にして示すことで、自分で判断して先に進んだり、立ち戻ったりすることができていた。7つの視点を整理したことで、子どもがその見方・考え方を働かせているときに価値づけの指導がしやすくなった。自分のペースで学ぶ時間を確保することで、粘り強く取り組む姿が見られた。

課題

算数・数学で身に付けた見方・考え方を日常生活や社会の事象に繋ぐ手立てが十分ではなく、授業以外の場面でも子どもたちが自ら問いを言い出す機会が少なかった。また、教科指し振は7つの視点を重視しているが、子どもたちが7つの視点に対してどうの関心を持っているか、子どもたちの7つの視点に対する感情移入を促す、子どもたちに共有している重要性を感じる。子どもたちにとって重要で、自分自身で取り組むことができるような課題を設定していく必要がある。

教科での取り組みの課題

来年度に向けて

①「学校」で学びの場としての発展的学習や探究的学習の場としての学びの場を「考え方を発展的に育てる」場として、《発達段階や単元に応じて7つの視点を振り回していく、求める7つの視点の質等を段階的に変えていく》学習を進めていく。理解度に差が生まれ、得意な子と苦手な子が出てくる。そんな子どもたちの困り感を解消するため、考えを伝えあったり、他の視点から考えたり、より主体的な学びの実現を目指す。協同的な学びの機会が少なくなりました。意図的な場面設定と、解きたくなくなる問いの設定も継続すべき課題である。

②7つの視点に対する児童生徒の実態把握と非認知能力の見取りのためにアンケートを実施していく。

③日常生活と数学を繋ぐ工夫。日常の問題を数学的な見方・考え方を働かせて解決する手立てを提示していく。

教科 DS で示された「教科で大切にしたいこと」が実際の子供の姿で見取ることができたか、具体的にに取り組んだことの成果などを示している。成果があれば、子供の姿にあらわれるはずであり、姿をもって振り返る場となっている。

成果と同様、子供の姿で振り返った時に、期待していた姿が見られなかった、子供の学びが上手に組み立てられなかったなど課題が残った部分についての省察である。教師の手立てや題材の設定など様々な面から省察している。

成果や課題を受けて、来年度の教科部としてどのような取り組みを行っていくのか、重要視したい資質・能力についての見解を示している。



IV 研究方法

(1) 授業研究

主に、各教科の授業研究である。本校の授業研究は、小中合同で子供の姿を中心に協議を進めていくことを大切にしている。授業研究や日々の授業での子供の姿を見取り、授業改善を繰り返しながら、学校教育目標に迫る子供の姿を目指していく。

以下に示す研究協議会までの流れは、本校で行っている授業研究（研究授業）において、小中学校の職員で共有している内容である。

1 研究授業の前に...

① 課題の設定

授業 DS を読み込み、授業 DS 内に記された「学ぶ子供の姿・具体的な発言や反応」と「子供の姿の見取りプラン」をもとに、授業における具体的な子供の姿を想像する。

2 研究授業では...

② 情報の収集

授業全体を見つつ、ある程度子供を特定してその子の言動とそれに紐づけられた思いや願いを読み取るようにする。そして、具体的に見られた子供の姿を付箋紙に記録する。

【付箋紙の記入例】

〇〇さん(児童・生徒名)の発言・行動「〜〜」。
「やりたい！」という思いをもって取り組んでいた
(参観者氏名)

〇〇さん(児童・生徒名)のノート「〜〜」。
教科の目的に向かう姿が見られた。
(参観者氏名)

3 研究協議会では...

③ 整理・分析

子供の姿を記録した付箋紙をもとに協議を進める。

- ① 付箋紙を貼りながら、実際に見られた子供の姿を共有する。
- ② 子供の事実をもとに、重点①②に関する成果と課題を明らかにする。

「本単元(題材)で願う子供の姿」に迫るための“授業 Re:デザイン”(改善案)について検討する。このとき、子供の姿の見取りから生かす授業改善の視点を大切にする。

- (③ 講師の先生より、指導・助言をいただく。)

4 研究協議会の後は...

④ まとめ・表現

授業ごとに協議会で話し合われた内容を発表し、重点①②の成果と課題について全体で共有する。

ここで示されている「重点①②」は、

重点① 子供の「やりたい！」を引き出す手立てと思いを生かす環境づくり

重点② 解決のすべ（教科で育成する力）の育成に向けた授業デザイン

のことであり、各教科が年度当初に検討した教科 DS をもとに、今回の授業の単元を計画する上で、具体的に工夫したポイントである。授業で見て欲しいポイントをあらかじめ明確にすることで、実際の子供の姿としてどのような場面で、どのような言動が見られたか、参観する先生方の見取りを、授業者に的確にフィードバックできるようにする。

<資料 1>実際に協議会で使用するシート

中1年 教科：理科	単元名 (教科名)	協議シート	2023年 5月30日 協議メンバー	小中合同授業研究会【年 組】 授業会場： 授業者：
本単元における重点				
重点① 子供の「やりたい！」を引き出す手立てと思いを生かす環境づくり		重点② 解決のすべの育成に向けた授業デザイン		
①子供の事実の共有 〇〇さん(児童・生徒名)の発言・行動「〜」。 「やりたい！」という思いをもって取り組んでいた (参観者氏名) 〇〇さん(児童・生徒名)のノート「〜」。 教科の目的に向かう姿が見られた。 (参観者氏名) ②それぞれの成果と課題の共有 ※授業改善の視点 ・願う子供の姿が見られたのは への授業デザインがあったからだ。 ・もっと～な姿を期待する。そのために、次時に～してみたらどうか				

<資料 2>協議会の実際の様子



※協議会では、小中校種の横断、教科の横断もある中で、子供の姿を中心に語り合う。

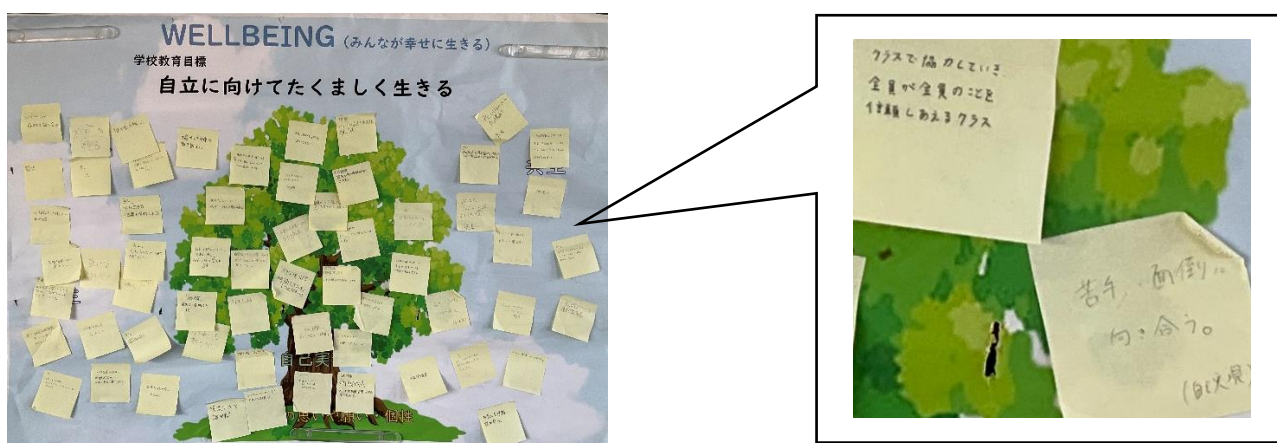
(2) 特別活動

キャリア・パスポート、年度当初の学級開き（下の資料3）、行事の目標決め等を活用し、学校教育目標の実現に向けた視点をもって、「自己実現」をしている姿と「共生」する姿を目指して指導に当たっている。しかし、小学校と中学校では、特別活動における具体的な手立ての共有は十分とはいえない。今後は教科だけでなく、小中の行事等を共有し、学校教育目標の実現に向けた9年間の教育課程を創造していく必要がある。

	小学校	中学校
体育的行事	運動会	陸上競技大会
泊を伴う行事	各学年宿泊学習を実施	スキー教室、修学旅行
文化的行事	音楽会	合唱祭
総合的な学習の時間の発表会	鎌小 LIVE	LIFE 学習発表会
その他	お弁当の日 にこにこ班活動 児童会活動、委員会	生徒会活動、委員会
教育課程外	クラブ活動	部活動

現在は関連する行事の共有（上の表）のみでとどまっているので、次年度はカリキュラム・マネジメントの視点から行事の意義、目的を再度整理し、小中のつながりを意識した見直しが必要である。

＜資料3＞中学校では学級開きで学級目標決めに向けた掲示物を共通で作成している



※学校教育目標をふまえ、1人1人の思いや願いを共有し、学級目標を考えていく

V 個別最適な学びについて

本校では、「個別最適な学び」についての研究の中で、「学習の個性化としての環境づくり」は、研究構想図の□の根幹部分にあたり、本校の研究で重要視している取り組みである。

今までの鎌倉小中学校には、子供たちが自分の得意を見つけたり試したりする場や、興味関心の赴くままに学習活動できる場がなかった。学びは教師の管理の下にあり、自分たちの興味関心を見つける環境が用意されていないという現状であった。「学校は誰のための場か？」と問われた時に、「子供のため」と答える先生は多いと思うが、本校職員は、「本当に子供たちの個性に合わせた学習環境が用意されているか」という問いに向き合う必要があった。

そのような経緯から、1つの取り組みとして取り組んできたことが「学習の個性化としての環境づくり」である。一人ひとりの子供は、興味や関心は異なる。そのため、適切な環境が何かも一人ひとり異なる。

学習内容を習得していくスピードにも差があるということを前提とし、そのような子供たちが、「〇〇したい！」「〇〇になりたい！」という想いや願いを持って学習を進めていくことを考えて行った取り組みである。子供は、適切な環境と出会いさえすれば、自ら進んで環境に関わる。従来の教師の役割として、直接的に教えることに加えて、学習環境を整えることによって間接的に学びを促し支援することを試みた。



掲載した写真からは、環境が用意されていることで子供たちが興味をもってその環境に進んで関わる様子が伝わってくる。環境さえ用意されていれば、子供たちは興味・関心に基づいて自ら学ぼうとする思いがあることを知ることができた。これが子供たちの「〇〇したい！」「〇〇になりたい！」につながっていくかどうかは、長い目で見ていく必要があるが、ひとまず、学校に自分のやりたい事ができる場があって、休み時間という自由な時間にもかかわらず、学んでいる姿があるというのは大きな成果であると考えている。小学校の社会科では、子供にどんな環境が用意されて欲しいのか、子供たちの声を聞く場を設け、子供の求めに応じて環境をアップデートさせていく取り組みをした（右下写真）。それは、子供たち一人ひとりが潜在的に求めている多様な学びを顕在化させたのである。実際には、5年生の社会科で公害の学習をした折に、写真集を用意してほしいという声や、工業生産の学習では自動車部品を置いてほしいという声があったため、可能な限り用意し子供たちの手に取れるようにした。そういった地道な取り組みから子供たちの興味・関心が広がり、探究の初めの一步がスタートするのではないかと願って取り組んできた。また、取り組みを進めていく過程で、次のような成果や課題も見えてきた。



<成果>

(中)生徒たちの興味関心を高め、子供たちに動きが見られた。

(中)職員間の共有ができ、教師側に、環境をきれいにしようという意識が芽生えた。

(小)自由度が高いので、子供たちは朝、休み時間などに子供たちが友達を誘って環境に関わり、教科のおもしろさに触れていた。

(小)場づくりを行ったことによって、継続してよくしていこうとする教師側の意識が高まった。

(小)子供たちが楽しめるようなことを職員が楽しみながら用意していた。

<課題>

(小)「興味はあるが時間がない」「優先順位は低い」という姿も見られた。子供にゆとりの時間があるかどうかポイントとなった。

(小)「探究したいことを探究する場所」なのか、「興味関心を引き出す場所」なのか悩む。 ※²

(中)中学校の場合、中休み、昼休みに、特別教室は「基本入らない・入れない」だったので、現在は運用が曖昧になってしまった。中学は小学校よりも自由度が低く、「いつでも自由に」とは違うのが現実。

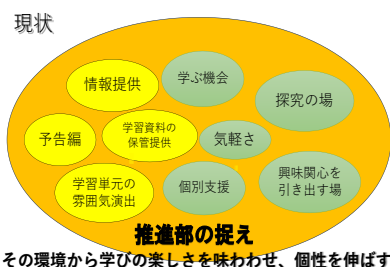
(中)中学の場合、生徒にもゆとりがない。 ※¹

(中)中学には見本がなく苦しいところがある。 ※³

今年度の一年で、上記のような反省が出た。そして推進部では、大きく二つの問いが生まれた。一つ目は、「中学校では、どのようにすれば子供の個性を生かし、子供たちの『やりたい』を引き出していけるような取り組みができるのか。」という問いである。 ※¹でわかるように、中学校では、目的が受験になっている子供たちが多く、中学校の子供たちには小学校の時のような時間にゆとりが無いということが、環境に関わる子供たちの様子から顕著になって表れてきた。中学では、小学校のように目に見えるような子供の姿が少なかった。推進部で話し合いを進める中で、小学校と中学校では子供が求める環境に違いがあることから、小学校の場合は、環境＝「学びの場」、中学校の場合は環境＝「学びの機会」という意味合いが強いのではないかという答えにたどりついた。実際に中学校の外国語科では、子供たちの求めに応じてオンライン勉強会を開いた。(右写真) 個別支援の意味合いを含んだ、学習機会の提供である。小学校と中学校で同じことをやっても上手くいかないということに気付けたことは、大きな成果であるとする。



もう一つは、 ※²のような声があったように、「教科によっても場や機会の運用の仕方は異なるのではないか」という問いである。また、 ※³のように、見本がないからこそ運用の仕方に悩む教科もあった。そのため、運用の仕方について職員の中から出てきた声を推進部でまとめ、「附属鎌倉小・中学校ならではの」目的を整理し直した。その目的は、「その環境から学びの楽しさを味わわせ、個性を伸ばす」である。この目的にそった運用の仕方として、各教科部でどのような運用の仕方をしていくのかを考えし、本年度の研究のまとめとした。



運用の仕方について職員から出た声



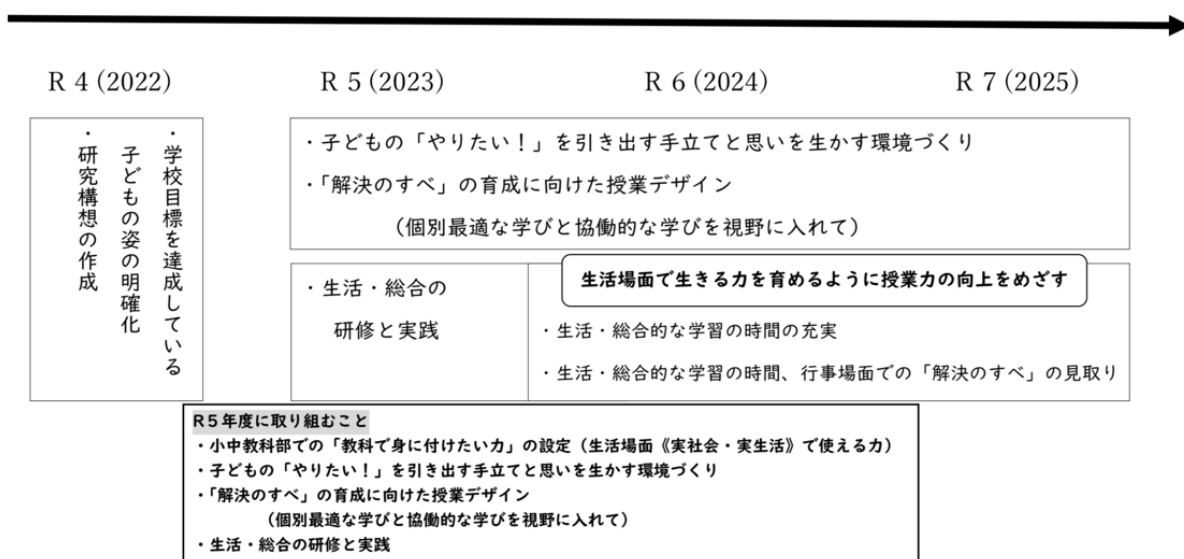
教科ごとにまとめた運用の仕方(社会科部の例)

VI 研究の経過

3年間の目標として、「実社会、社会生活に生きる教科の学びを意識しながら、総合的に子どもを育成していく」ことを設定した。今年度はその1年目として、「重点1、2を意識した授業づくりと実践の積み重ね」を目標とした。その上で、3か月単位で研究年間計画を立てた。

研究の重点（3年間）

- ①子どもの「やりたい！」を引き出す手立てと思いを生かす環境づくり
- ②「解決のすべ」の育成に向けた授業デザイン（個別最適な学びと協働的な学びを視野に入れて）
- ③生活・総合の研修と実践
- ④生活・総合的な学習の時間の充実
- ⑤生活・総合的な学習の時間、行事場面での「解決のすべ」の見取り



基本的な流れ

小中研究推進委員会を開いて研究の方向性や次回の小中研究会の内容を確認し、小中研究会では全職員で共有する、という流れを確立した。

小中研究会では主に、研究構想をもとに教科部の目標づくり（教科DSの検討）や、授業づくり（授業DSの検討）、個別最適な研修などを行った。全体研修の後、小中教科部で集まる時間を設け、小中のつながりを見出しながら各教科で身に付けたい力や授業づくりについて考えていった。詳細は次頁の研究計画の通りである。

2023年度 附属鎌倉小中学校 研究運営計画					
研究主題「自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造 ～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン（１年次）」					
日	曜	回数	会議	内容	開始時間（予定）
4月4日	火		小中研①	今年度の研究について（教科部話し合い①）	13:00
4月5日	水		小中研究推進	組織の確認と年間計画	12:30
4月11日	火		小中研②	研究の目的、研究構想の共有、研究計画について	16:30
4月18日	火		小中研究推進	小中デザインシート（DS）検討会（教科DS・授業DS・特色DS）	16:30
4月25日	火		小中研③	小中DS提案、各教科で身に付けたい力の検討	16:30
5月9日	火		小中研④	生活・総合研修 "Most Likely To Succeed"視聴・議論	16:30
5月16日	火		小中研⑤	単元づくり研修 生活・総合単元づくり研修	16:30
5月23日	火		小中研⑥	個別最適な学び研修 授業研に向けて	16:30
5月30日	火		小中合同授業研①	（数学・理科・社会）中学校４校時・小学校５校時公開授業	11:25
5月30日	火		小中研⑦	合同授業研究会協議	16:30
6月6日	火		小中研究推進	運営／研究／発信／DS／個別最適 各グループ提案等	16:45
6月6日	火		（小中研）	個別最適な場づくり（各教科）	16:30
6月13日	火		小中研究推進	運営／研究／発信／DS／個別最適 各グループ提案等	16:45
6月20日	火		小中研究推進	運営／研究／発信／DS／個別最適 各グループ提案等	16:45
6月20日	火		（小中研）	生活・総合 単元づくり	16:30
6月27日	火		小中研究推進	運営／研究／発信／DS／個別最適 各グループ提案等	16:45
6月27日	火		（小中研）	重点①（したい、なりたい）を意識した授業提案①	16:30
7月4日	火		小中合同授業研②	（生活・道徳・体育）中学校４校時・小学校５校時公開授業	11:25
7月4日	火		小中研⑧	合同授業研究会協議	16:30
7月11日	火		小中研究推進	8/21,22小中研究会に向けて	16:30
8月21日	月		小中研⑨	10/6,10/7 研究発表会に向けて	9:00
8月22日	火		小中研⑩	10/6,10/7 研究発表会に向けて	9:00
9月5日	火		小中研究推進	研究発表会に向けて（研究大会当日について）	16:45
9月5日	火		（小中研）	研究発表会準備（授業DS作成等）	16:30
9月12日	火		小中研⑪	授業ブロック検討会	16:30
9月19日	火		小中研究推進	研究発表会運営計画確認	16:45
9月19日	火		（小中研）	研究発表会準備（授業DS作成等）	16:30
9月26日	火		小中研⑫	研究発表会に向けて（研究大会当日について）	16:30
10月3日	火		小中研⑬	小中合同リハーサル（最終確認）	16:30
10月6日	金			研究発表会	
10月7日	土			研究発表会	
10月17日	火		小中研⑭	研究発表会の振り返り	16:30
11月21日	火		小中研究推進	研究紀要・小中合同授業研について	16:30
12月5日	火		小中合同授業研③	（国語・図工美術・技術家庭）小学校１～３校時・中学校４～６校時公開授業	8:50
12月5日	火		小中研⑮	合同授業研究会協議	16:30
12月12日	火		小中研究推進	共生・小中合同授業研について	16:30
12月19日	火		小中研⑯	1/16合同授業研に向けたDS検討	16:30
1月16日	火		小中合同授業研④	（外国語・音楽・総合）小学校３・４・６校時・中学校１・２・５校時公開授業	8:50
1月16日	火		小中研⑰	合同授業研究会協議	16:30
1月23日	火		小中研究推進	個別最適・共生について	16:30
1月30日	火		小中研⑱	各教科重点の振り返り・教科ReDS検討	16:30
2月13日	火		小中研⑲	学習の個性化・個別最適な場づくり研修	16:30
2月20日	火		小中研⑳	共生に関する研修	16:30
2月27日	火		小中研究推進	来年度の研究に向けた検討	16:30
3月5日	火		小中研㉑	研究の振り返り共有 総合的な学習の時間・来年度の研究について	16:30

今年度、21回の小中研究会と13回の研究推進委員会を実施し、校内研究授業として小中合同授業研究会を4回実施した。これ以外にも、小中各教科部で集まって検討したり、研究推進委員同士で集まって打ち合わせをしたりして、小中のつながりについて考えていった。

1・2学期の研究発表大会前は、各教科の目標や、提案授業内容の検討を中心に行った。研究発表大会後は、研究発表大会で参観者の皆様から頂いたご意見や振り返りを中心に反省・検証を行い、小中合同授業研究会で改善を図ったり日々の授業に反映したりしていった。3学期は、小中合同授業研究会を中心に日々の授業を振り返り、次年度につなげていくための検討（これまで作成した授業DSの振り返り（授業Re:DS）や教科DSの振り返り（教科Re:DS）など）を行っていった。

お申込みについて

- ・研究発表会の事前お申込みは表紙のQRコードから行ってください。
- ・事前にお申込みいただくと、当日の受付がスムーズです。
- ・事前申込みの締切は10/2(月)17:00です。締切以降は本校のHPをご覧ください。
- ・当日参加も可能ですが、昼食の購入はできませんので、各自で準備ください。
- ・研究に関する資料は本校ホームページよりご覧いただけます。

アクセス

小学校体育館で受付をしてから小中連絡通路で移動ができますので、小学校体育館にお越しください。

校内研究や各種研究会のお手伝いをさせていただきます！

本校では、授業づくりについて、事例提供・模範授業など、要請に応じてお手伝いできるような準備をしています。ぜひ、お気軽にご連絡ください。

研究発表会当日のご都合が合わない方…日常の学習の様子も見学できます！

本校は、研究発表会の他、日常の学習の様子を見学に来ていただくことができます。子供たちが学び合い、生き生きと生活する様子を見学しにいらしてください。ご連絡お待ちしております。

YNU 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小中学校

〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪ノ下3-5-10

TEL (小学校) 0467-22-0647 (中学校) 0467-22-2033

小中合同研究発表会

「自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造」 ～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～

令和5年 10月6日(金) 7日(土) 参加費無料

小学校・中学校の公開授業 & 協議会

申込はこちらから↓

10/6(金)
15:15～16:15

玉川大学 教師教育リサーチセンター 客員教授
笠原 陽子 先生

講演テーマ
これからの学校教育の展望
～附属鎌倉小中学校の研究を踏まえて～

10/7(土)
15:15～16:15

上智大学 総合人間科学部教育学科 教授
奈須 正裕 先生

講演テーマ
資質能力を基盤とした学力論と授業づくり

次年度に向けて

小中の学校行事（音楽会・合唱祭や面談期間、試験期間など）によって、お互いに顔合わせができない週や、小中合同授業研究会（校内研究授業）に向けた打ち合わせが行いづらい時期があった。そのため次年度は、毎週火曜日の小中研究会は小中の教頭・教務間で十分に打ち合わせを行い、小中研究会の中で打ち合わせが十分に行えるよう体制を整えた。

これまでも打ち合わせは随時、小中教科部の間で小中学校を行き来しながら行っていたが、行事が立て込むとなかなか時間がとることができていなかった。これは小学校だけ、中学校だけでも同じことであり、小中の課題というよりも学校全体としてこの時期に何に力を入れているかの違いによるものと考えられる。通年で小中教科部として綿密にコミュニケーションをとり続けていくと少しずつ解消されるものかもしれないが、校長のリーダーシップのもと、管理職と研究推進委員会が協力して、小中教科部のやり取りがしやすくなるよう働きかけることが求められている。次年度は小中研究会の時間で確実にやり取りができるよう仕組みを整えていく。

VII 研究の成果と課題

成果

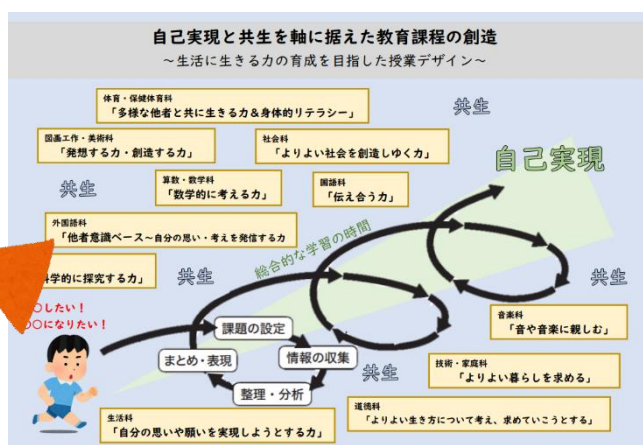
1、研究の目的

小中9年間で目指す子供の姿が明確になった。Well-being に向けて、子供たちの「自己実現」と「共生」の姿を目指していくという分かりやすく、職員誰もが意識できるものになった。分かりやすい目的を職員みんなで作り出すことができ、共有できていることがこれからの研究にとって大切なことだと考えている。



2、研究の構想

「自己実現」と「共生」の姿に向けての研究構想がより具体的なものになってきた。各教科で目指す姿を明確にしたことで、教科で身につけた力を生活科・総合的な学習の時間で発揮していくイメージがより具体的になった。



3、教科の目的

これからの時代「なぜ教科学習が必要なのか？」ということを改めて問い直し、各教科の価値を明確にした。また、その教科で大切にすることを1つに絞っていくことでみんなが意識できるものになっていった。やはり、目的は分かりやすく端的なものにすることが大切だと感じている。そうすることで、立ち戻るところをみんなが共有でき、目的を意識した授業づくりに繋がっている。また、各教科で身につけること、目指す子供の姿を小中の教科部で話し合いを重ね明確にしていけたのがよかった。目指す姿に向かうまでの手立てを系統立てて考え、小中の学びを繋げていく意識ができてきたのもよかった。この取り組みが、小中の繋がり歩みの1歩目になっている。

また、職員が他教科の教科DSを読むことで、教科同士の資質・能力や手立ての繋がりを考えるきっかけにもなった。



4、授業実践

授業では、教科で目指す姿が以下の2点に重点をおき、授業をデザインしてきた。子供が探究的に学びながら教科で身につける力を育成していけるようにねらって考えた重点である。

重点① 子供の「やりたい!」を引き出す手立てと思いを生かす環境づくり

重点② 解決のすべ（教科で育成する力）の育成に向けた授業デザイン

この2点を単元や本時で意識できるように授業デザインシートの作成を進めることができた。また、この2点での手立て、見られた実際の子供の姿を教科部ごとに蓄積していったのがよかった。来年度以降のさらなる積み重ねが今後の成果につながると考えている。

研究の重点①・②の取り組みを整理して次年度に繋げよう	
重点① 子供の「やりたい!」を引き出す手立てと思いを生かす環境づくり	重点② 解決のすべ（教科で育成する力）の育成に向けた授業デザイン
1. 子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	1. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
2. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	2. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
3. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	3. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
4. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	4. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
5. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	5. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
6. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	6. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
7. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	7. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
8. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	8. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
9. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	9. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
10. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	10. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
11. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	11. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
12. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	12. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。
13. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。	13. 子供の「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。子供が「やりたい!」を引き出す手立てを、授業で実践する。

研究の重点①・②の取り組みを整理して次年度に繋げよう	
重点① 子供の「やりたい!」を引き出す手立てと思いを生かす環境づくり	
「やりたい!」を引き出す手立て	見られた子どもの姿
既習事項を引き出す導入・発問	自らの知識を語りだす姿
材との出会いに実物にふれる。(一般的ななまぐりと湘南のはまぐりを比べて示す。)	実物から村に興味を示す姿。
ずれ(予想・考え・認識)を生み出す工夫	ずれを認識することで、そのずれを解消しようとする姿
社会で活動する人との出会い。その人の葛藤を自分事として考えさせる。情意を演出させる。	自分事として考えることで、深く考えようとする姿。

5、学習の個性化の場づくり

研究構想図の□の部分にあたることを重要視して、学習の個性化に力を注いできた。一人ひとりの子供には個性があり、興味・関心や学習スピードが違うということを前提として、そのような子供たちが、「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」を持って探究の1歩目を踏み出すにはどうしたらよいのか。ということを考えて行っている取り組みである。目的を「その環境から学びの楽しさを味合わせ、個性を伸ばす」と鎌倉小中では捉え直し、環境づくりにフォーカスして取り組めたのがよかった。



上の写真のように、場があることで興味をもって遊びながら学ぶ姿が見られた。これが子供たちの「〇〇したい!」「〇〇になりたい!」につながっていくかどうかは、長い目で見ていく必要はあるが、ひとまず、学校に自分のやりたい事ができる場があって、休み時間という自由な時間にもかかわらず、学んでいる姿があるというのは大きな成果である。

6、小中連携

今年度から小中、全て同じ日程で研究を進めたことにより、小中の職員同士で話し合う機会が大幅に増えた。そのため、互いを知る機会が増え、歩み寄る姿が見られるようになってきた。小中の教科部で声を掛け合い、集まって研究を進める場面も見られるようになってきた。小中の文化が大きく違う中で一緒に研究を進めるということで、昨年度職員からは「文化が違い過ぎるので、絶対に相まみえない」という声も聞こえてはいたが、少しずつよい方向に向かっているように感じている。しかし、小中の研究を進める難しさは感じている。その点を成果として以下に示す。

- ・どちらかにとって無理のある研究になっている時

→小中、同じ日程で進めているので、その研究日前後の忙しさは違う。そこを理解する事が必要である。今年度はそれぞれの都合で、研究が行えない日が多くあった。この点は小中の行事予定の精選をできる限りしていく必要がある。

- ・理想を掲げすぎて、急な変化を求めた時

→研究開発校、義務教育学校など、先進的に進めている学校があったり、教育には高い理想があったりする。しかし、それは一つの視点であり、今の子供・今の職員で行っている本校の研究にとって急ぎ過ぎていないかを常に立ち戻らなければならない。

- ・研究日を別にすることで、職員間での話し合いの内容にズレが出始める可能性があるのでは、気をつける必要がある。

小中の職員の授業での交流が次の動きとしては大きな一手になるのかもしれない。歩みを急ぎ過ぎず、職員の実態を見ながら1歩1歩成果を積み重ねていくことが大切だと感じる。

7、研究組織

小中それぞれ推進部から6人ずつ、合計で12人のメンバーで組織することになった。人数が増えることは多くの人の考えを聞けるメリットはあるが、みんなが揃わずに共有が難しくなったり、進みが悪くなったりするというデメリットがある。そこで、以下のような研究組織を作り、各グループに多くの裁量を持たせるようにした。そうすることで、各グループのメンバーで集まれば様々な提案が動いていく。また、最終決定は小中の研究推進委員長との話し合い後に進んでいくので、人数は多くなっても動きはよかった。

小中研究推進委員会メンバー				
グループ名	内容	担当推進メンバー（○は主担当）		
研究運営計画	研究運営計画 研究関係全般	○川口（小） 〔総合〕	小山内（中） 〔総合・社会〕	
DS・紀要	DS 関係 紀要（本）	○小野（中） 〔数学〕	足立（小） 〔音楽〕	荒川（中） 〔体育〕
研究・授業研	研究運営 授業研準備	○奥平（小） 〔理科〕	友廣（中） 〔英語・総合〕	（小中管理職）
情報発信・ 振り返り	研究情報発信 研究会振り返り	○西村（中） 〔理科〕	於保（小） 〔家庭〕	
個別最適	個別最適な学び	○上田（小） 〔社会〕	出越（小） 〔体育〕	三井（中） 〔美術・総合〕

課題

1、研究主題

研究主題を「自己実現と共生を軸に据えた**教育課程の創造**～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～」としている。今年度、成果にも書いたように研究構想の具体は進んだが、教育課程の具体的な在り方については研究が進んでいない。教科の目的を達成するために、どの単元にどのくらいの時間をかけていくのか。単元ごとの軽重を考え、教科ごとに単元配列表を作成していけるようにしていきたい。そのためにはまず、教科の目的を達成するための柔軟な授業づくりに力を注いでいく必要があると考えている。

2、子供の姿と手立ての蓄積のタイミング

今年度は、年度の終わりに各教科の授業の手立てとそこから見られた子供の姿を記載する時間を設けた。来年度以降は、子供のよい姿が見られた際にいつでも書き込めるように準備しておく。子供の姿と授業の手立ての積み重ねが、今後の授業づくりの深みを増してくれると考えている。

3、生活に生きる力の授業デザイン

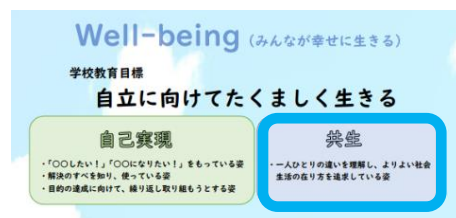
授業の重点②「解決のすべ（教科で育成する力）の育成に向けた授業デザイン」を掲げているが、各教科で生活に生きる力を育てていくには、学年内の積み重ねや学年の繋がりを可視化していく必要がある。それが、子供の姿をベースしながら作成できてきた時に、解決のすべ（教科で育成する力）の育成に向けた授業デザインがより実現可能なものになる。1、研究主題と関連しながら歩みを進めていきたい。

4、生活科・総合的な学習の時間の在り方

来年度から生活科・総合的な学習の時間を研究の中核に置き、実践を通して研究を進めていく。鎌倉小中の子供と職員で行う独自の生活科・総合的な学習の時間（LIFE の時間）を作り出していくと共に、小1～中3までをどのように繋ぎ、学びを展開していくのかを明確にしていく。「生活の拡充」「活動的な時間」ということを大切に子供が自分たちで学びを進めるプロジェクトが展開できるようにしていきたい。

5、「共生」に向けて

「一人ひとりの違いを認識する」「意見が違う中で合意形成に向かう」子供の姿をもっと見られるようにしていきたい。という声が職員から出てきた。研究構想や研究計画（3年計画）自体が「自己実現」に重きを置いた計画だったため、今後の計画を再度作り直す必要が出てきた。研修を通して「共生」に向けての意識を高めていくこと。来年度の授業づくりに生かせるようにすることを来年度以降の課題とする。



6、研究の成果の捉え

学校研究の成果を何で捉えていくのかがはっきりしていない。児童生徒質問用紙を作成して毎年の変化を追いつながりながら見取っていくのか。子供の授業での様子、学校生活の様子を見取りながら、その姿を基に成果を見出していくのか。ここも来年度の課題となる。